

今週の為替相場見通し(2019年8月26日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ	
		注	レンジ	終値		
米ドル	(円)		105.26 ~ 106.73	105.35	103.50 ~ 106.80	
ユーロ	(ドル)		1.1051 ~ 1.1153	1.1143	1.1000 ~ 1.1200	
(1ユーロ=)	(円)		117.28 ~ 118.47	117.44	114.50 ~ 118.50	
英ポンド	(ドル)		1.2065 ~ 1.2296	1.2280	1.2150 ~ 1.2350	
(1英ポンド=)	(円)	*	128.27 ~ 130.70	129.31	128.00 ~ 130.50	
豪ドル	(ドル)		0.6736 ~ 0.6799	0.6755	0.6630 ~ 0.6780	
(1豪ドル=)	(円)	*	71.03 ~ 72.41	71.22	69.00 ~ 72.00	

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 103.50 ~ 106.80 円

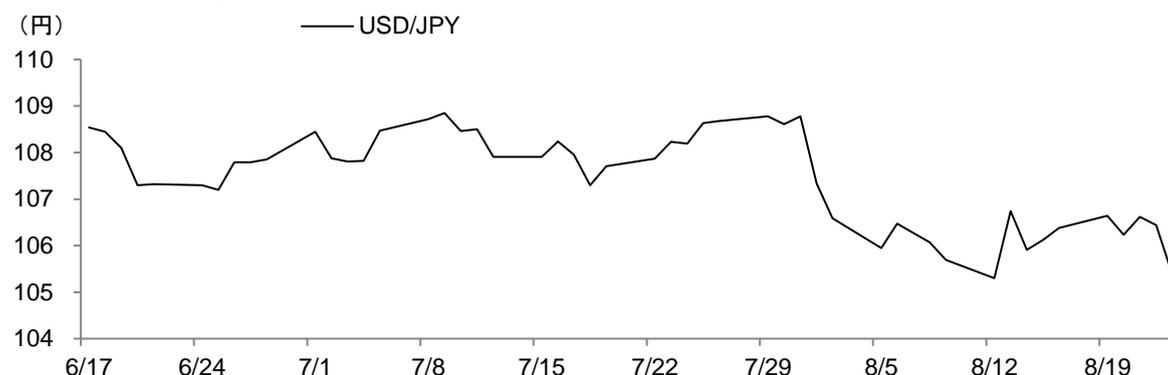
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週末に急落する展開となった。週初19日に106円台半ばでオープンしたドル/円は、米長期金利が1.6%台を回復したことや、米政府が中国電子機器大手に対する制裁猶予を90日間延長すると発表したことで106円台後半まで上昇。その後も、ローゼンブレン・ポストン連銀総裁の利下げに対する消極的発言がドル買いを促し、106円台後半での小確りとした推移が続いた。20日は五・十日絡みの本邦輸入勢のドル買いに支えられたが、一巡後は米金利低下・米株安を背景に106円台前半までじり安。翌21日は米長期金利が1.6%台近辺まで持ち直す動きにドル/円も106円台半ばまで上昇。一旦小緩むも、FOMC議事要旨が市場予想ほどハト派寄りでは無いとの見方が拡がり106円台半ばで底堅く推移。22日は、翌日にパウエル議長のジャクソンホール講演を控える中で様子見ムードが強まる中で106円台半ばを中心とした方向感の乏しい展開。そして23日は、米金利が1.6%台半ばまで上昇する中で、週高値106.73円まで上昇。しかしその後、中国が米国に対して報復関税を発表とのヘッドラインが伝わると106円台前半まで下落。また、パウエルFRB議長の講演原稿にて「経済は望ましい状況だが、著しいリスクが迫っている」との記載が確認されるとドル売り優勢の地合いとなる。加えて、トランプ米大統領が「本日午後中国の新たな関税措置に対応する」と述べると、米中貿易戦争の激化懸念が再燃しドル売りが加速したことから、106.00円を下抜け105円台前半まで下落。週安値105.26円を付けた後、105円台前半で越週している。なお、週明け26日は早朝からドル売りが強まり、104円台前半を付ける局面も見られた。

今週のドル/円相場は下値リスクに警戒が必要な局面か。米中通商問題に関しては金曜日に事態が動いた。まず、中国が米製品750億ドル相当に最大10%の追加関税を課すと発表すると、米国側は即座に、昨年発動した制裁関税の引き上げと今後予定される追加関税第4弾に関しても当初10%から15%へ関税を引き上げると発表。加えて、トランプ大統領は「米企業に対して中国撤退を命じる」とSNSに投稿するなど、通商問題を巡る米中関係は大きく悪化する事態となった。市場も金曜日の株式市場は大きく下落、米金利も低下するなど、米中貿易戦争への懸念を急速に織り込むなどリスクオフの状況。25日に、クドローNEC委員長は米中協議の継続姿勢を強調するなど事態の收拾に向けた動きをしているものの、一旦はリスク回避の動きが強まりやすい局面になりやすく、ドル円は年初来安値104.10円を下抜ける展開も想定されよう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/19~8/23)の値動き: 安値 105.26 円 高値 106.73 円 終値 105.35 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第一チーム 高村 尚史

(1) 今週の予想レンジ: 1.1000 ~ 1.1200 114.50 ~ 118.50 円

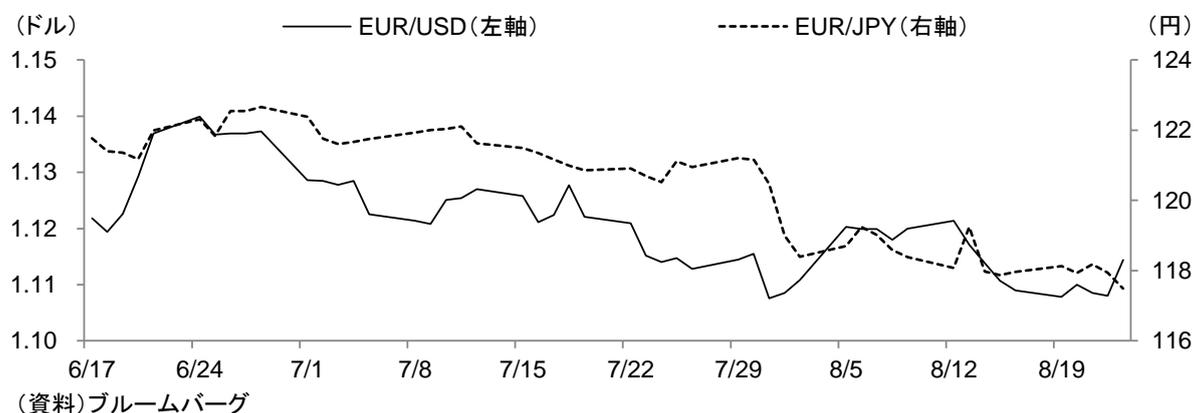
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週末にかけて上昇する展開。週初19日に1.11 近辺でオープンしたユーロ/ドルは、英国の合意なき離脱への懸念から上昇したユーロ/ポンドに連れ高となり、ドイツ政府が大規模な景気刺激策を準備しているとの報道に、1.11台前半まで上昇。その後は、米株や米金利の堅調な推移を受けたドル買いにユーロ/ドルは1.10 台後半まで反落。翌20日は、コンテ伊首相の辞任を受け1.1065 まで下落したが、独10年債利回りの低下が一服するとユーロの買戻しが優勢となり、米金利の低下にもサポートされ1.11台を回復した。21日はFOMC 議事要旨が発表され、予想ほどハト派でないとの見方が強まると、ユーロ/ドルは1.10 台後半まで値を下げた。22日は、ユーロ圏各国の8月PMI が予想を上回るとユーロ買いが先行し、ユーロ/ドルは1.11 台を回復したが、欧州株が軟調となる中で長続きせず反落し、1.10 台後半まで下落。23日は、中国から米製品への追加関税が発表され、ジャクソンホール会議においてパウエルFRB議長が講演で米経済の著しいリスクを指摘する中、一時週安値1.1051を付ける場面が見られたものの、次第にドル売り優勢に。更にトランプ米大統領より対中関税の引き上げが発表されるとドル売りが強まり、ユーロ/ドルは1.11 台を回復。週高値1.1153 まで上値を拡大し、1.11台半ばで越週している。

今週のユーロ/ドルは上値重い展開を予想。ECBは6月の理事会で20年半ばまでの政策金利据置を表明したが、7月の理事会で次の政策プロセスが明確に利下げへ転じた様子である。ドイツ4~6月期実質GDP が速報ベースで前期比マイナスなるなど、製造業を中心に域内経済の減速感が強く、次回9月会合での利下げ観測も高まっている。先週末の米中貿易摩擦懸念の高まりでドル安が進んだことでユーロ/ドルは反発しているが、ドルが此処許高止まりしていたことによって大きく調整が入ったものと思料。ドル指数は8月半ばからの上昇分を吐き出しており、今後のドル下落幅は限定されよう。ECBのハト派スタンス傾斜や域内経済の弱さ、Brexit情勢や伊政治リスクなどを勘案すると基調としてユーロが買いづらい展開は変わっていないものと考えている。27日(火)、29日(木)、30日(金)に発表される独・仏・伊の4~6月期GDP確報は注視しておきたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/19~8/23)の値動き: (対ドル) 安値 1.1051 高値 1.1153 終値 1.1143
(対円) 安値 117.28 高値 118.47 終値 117.44



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2150 ~ 1.2350 128.00 ~ 130.50 円

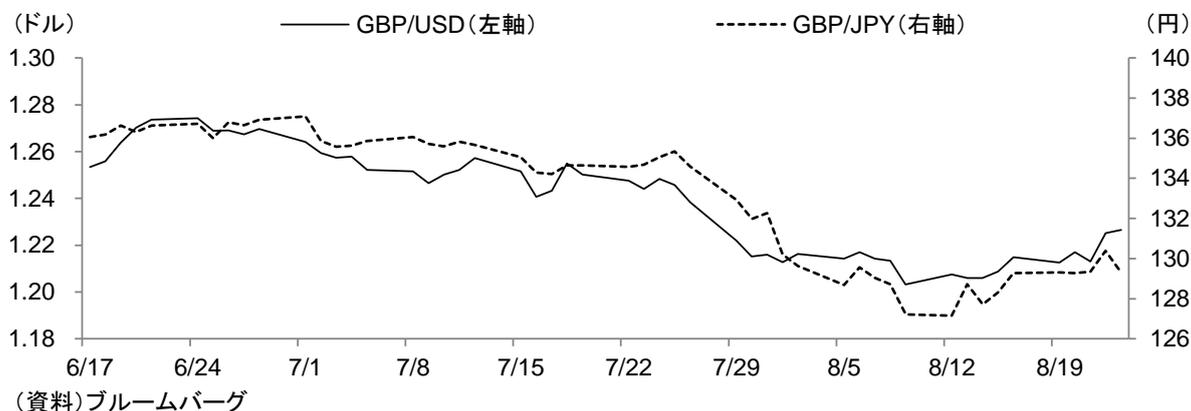
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、英のEU離脱交渉を巡る思惑の交錯から、方向感に乏しい上下動が先行。22日以降若干水準を切り上げたのは、合意なき離脱回避に向けた楽観の広がりが必要と考えられた。ジョンソン英首相は、19日、トゥスク欧州理事会議長に宛てた書簡で、アイルランド島国境を巡るバックストップ案の再交渉を要求したが、20日、トゥスク議長は「(バックストップ案を含む)離脱合意は再交渉しない」と明言。従来から一貫した姿勢通りの発言ではあったものの、ポンドは相応の失望売りを見た。そのポンドが、同日、俄かに反発したのは、メルケル独首相の「バックストップは不要」との発言が伝えられたからと考えられた。ただし、同発言は、「単一市場の完全性とベルファースト合意を両立させる解決策が見いだせれば」との前提に基づくもので、いずれにせよ離脱合意を修正する意図がないことを確認すると、ポンドは再び軟調に転じた。22日のポンド上昇は、前日の英独首脳会談で、「(バックストップの代替案を)30日以内に示す必要がある」と述べたメルケル首相が、「30日というのは『短期間』を意図しただけで、厳密に30日というわけではない」と述べたことや、同日の英仏首脳会談で、マクロン仏大統領が「30日以内に(バックストップの)代替案を見つけることは可能」と述べたことを好感した反応と考えられた。週引けを前に注目を集めたのは、23日に予定された米連銀パウエル議長講演だったが、実際に相場を攪乱したのはトランプ大統領だった。市場の(同大統領の)期待程追加利下げに積極的な姿勢を示さなかった同議長を「何もしなかった」と非難。続けて、「(同日中国が発表した対米報復関税に)反撃する」と述べた。一連の発言に、米株とドルが急落。ポンドも週引けに掛け対ドルではもう一段水準を切り上げた。

今週の英ポンド相場は軟調気味の膠着を予想。9月3日の英下院会期再開を目前に、EU離脱を巡る与野党の折衝はいよいよ佳境を迎えるものと見込まれる。ジョンソン内閣発足以来、合意に基づく離脱の可能性は著しく低下し、「10月31日の合意なき離脱」か「離脱そのものの取り止め」のいずれかの可能性がそれぞれ高まる二極化が進んだ。合意なき離脱は勿論ポンド安要因だが、離脱が取り止めになる場合も、内閣不信任成立、暫定政権による離脱延期申請、解散総選挙という道筋をたどる蓋然性が高く、政局不透明感を嫌ったポンド安が先行する可能性の方が高いと見込む。いずれにしても9月3日以降まで、状況が鮮明になる可能性は低いだらう。膠着を見込むもうひとつの理由は、この間のポンドの値動き(底堅さ)に対する違和感。上述、メルケル首相の「バックストップは不要」発言に飛びついて、一時的にせよポンドを買い上げるさまや、過去2年以上(国民投票からは3年以上)交渉してきて見つからなかった(バックストップの)代替案が、「メルケル首相が/マクロン大統領が『見つかるかもしれない』と言ったから」という理由でポンドを押し上げる市場の反応に、ポンド売り持ち高の積み上がりを読み取ることができた。情勢は限りなく悲観的だが、その悲観を基に積み上がったポンド売りが、これ以上のポンド安進行を抑制するのではないか。今週、市場の注目を集めそうな英経済指標などは見当たらないものの、23日にカーニー英中銀総裁が「合意なき離脱は(同銀の)利下げにつながる可能性がある」などと述べており、同銀の金融政策に関する思惑(27日の同銀金融政策委員会デンレロイ委員の講演など)がポンドに影響する可能性などが考えられる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/19~8/23)の値動き: (対ドル) 安値 1.2065 高値 1.2296 終値 1.2280
(対円) 安値 128.27 高値 130.70 終値 129.31



4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.6630 ~ 0.6780 69.00 ~ 72.00 円

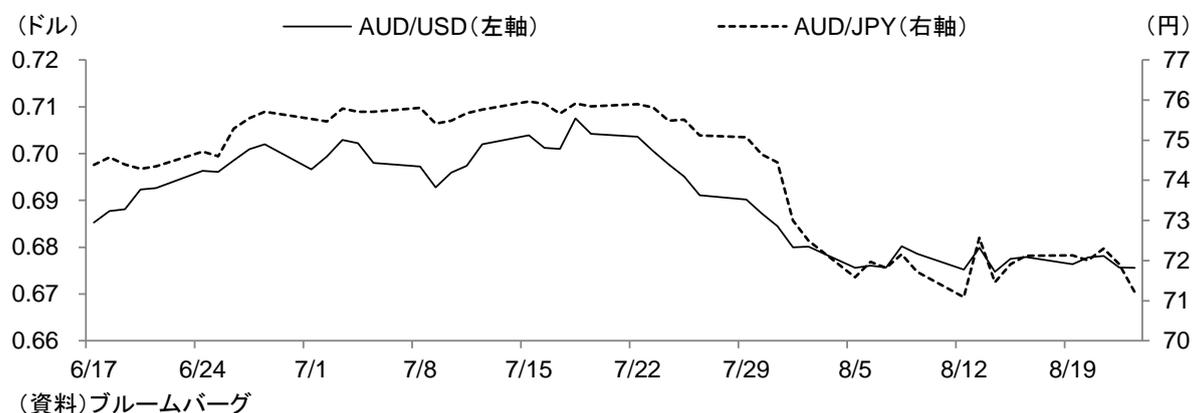
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.67半ばまで下落。週初19日、米国が中国の大手通信機器メーカーに対する制裁措置の一部猶予期間を更に90日間延長することが伝えられると、リスク選好の動きからオープン直後に豪ドルは買いが先行し0.6790近辺まで上昇。NY市場時間に入り米財務省が超長期債券の発行を再検討するとの報道から米国債利回りが上昇すると、米ドルが買い進まれ豪ドルはじりじりと値を切り下げ0.67半ばまで下落した。20日、朝方発表された豪週次消費者信頼感指数が前回は下回り今年4月以来の低水準となったことから豪ドルは0.6750台まで売り進まれたが、その後実需による買いが膨らみ一時0.6795まで上昇。この日発表された8月豪州準備銀行(RBA)議事録は特段目新しい材料は出ず、相場への影響は限定的だった。21日、朝方発表された豪7月景気先行指数が前回は大幅に上回る結果となったことを受け、豪ドルは一時買い進まれる局面があったものの直ぐに売り戻され、狭い範囲でレンジ推移が継続。欧米時間に入り、豪ドルはFOMC議事要旨の発表を前に0.68近辺まで買い進まれたが、市場が期待したほどハト派的ではなかったとの見方にドルが買い進まれ、豪ドルは再び0.6780台へ下落。22日、朝方発表された豪8月購買担当者景気指数(PMI)が製造業、サービス業ともに前回は下回り冴えない結果となったことを受け株価が下落する中、豪ドルはじりじりと売り進まれた。NY時間に発表された冴えない米8月PMIの結果を受けて、株価が大幅下落すると、豪ドルも売りが膨らみ一時0.6750近辺まで下落。その後米7月景気先行指数が予想を上回ると株価は買い戻され、豪ドルも0.6760付近まで戻して引けた。23日、アジア時間中はパウエルFRB議長の講演を控え動意薄い展開。欧米時間に入り、中国の報復関税に関する報道が流れるとリスクオフの動きから豪ドルは0.6736まで売り進まれた。注目されたパウエルFRB議長のジャクソンホール講演では目新しい材料は見当たらなかったものの、ドルは売りで反応し豪ドルは上昇。更に、トランプ米大統領が中国への新たな関税措置に対応する意思を明らかにしたことから、リスク回避の動きが強まり、豪ドルは0.6750近辺まで低下した。

今週の豪ドル相場は上値の重い展開を予想する。注目されたパウエルFRB議長の講演は大きな材料とはならなかったが、その後NY市場クローズ後に発表されたトランプ大統領による対中追加関税引き上げのニュースを受け、米中貿易対立激化への懸念からリスクオフが強まり、本日は各主要通貨がギャップオープン。先週はジャクソンホールでのパウエル議長講演一点に注目が集まっていたが、今週は米中貿易戦争悪化を背景としたリスク回避の動きが優勢になるとと思われる。29日に米4~6月期GDP、30日に豪7月住宅建設許可件数の発表がある他は特段注目される指標の発表が無い中、今週は米中貿易摩擦にかかるヘッドラインに反応する相場展開となろう。豪ドルについては、今月7日に付けた下値0.6678を下抜けるか注目される。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/19~8/23)の値動き: (対ドル) 安値 0.6736 高値 0.6799 終値 0.6755
(対円) 安値 71.03 高値 72.41 終値 71.22



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。